

最新事情

地域社会と連携し
将来について幅広く考える機会を

福井県立美方高等学校

(福井県三方上中郡若狭町)

地域社会との連携は、地方の学校においては大きな課題だ。福井県立美方高等学校は、昭和44年の創立以来、地域唯一の高校として大きな期待を集めてきた。その期待は、学校行事や、家庭学科の生活情報科、食物科における学校外実習への協力など、形ある支援として提供されている。生活情報科の取り組みを中心に伺った。

地元からの応援を背に 地域を担う若者を育てる

若狭湾有数の景勝地である三方五湖は、福井県嶺南地方の中ほどに位置する。湖畔にたえず福井県立美方高等学校は、全校生徒約480名、1学年が普通科3クラス、家庭学科の生活情報科・食物科それぞれ1クラスからなる中規模校だ。普通科では、平成17年度から地元の三方中学校、美浜中学校と連携型中高一貫教育が始まっている。一方、生活情報科ではファッションと情報を軸に保育・介護についても学ぶことで職業選択の幅を広げており、食物科では県内の公立高校で唯一調理師免許を取得できるなど、それぞれの学科が特長を打ち出している。

「普通科の生徒は、多くが県外の大学へと進

学し、大阪や京都などの大都市で就職します。地元に戻ってくる生徒は少ないのです。そのため、地元に残りたいという生徒は、最初から生活情報科や食物科で将来につながる職業について学ぶことを選択します。昨年度の2学科の卒業生のうち、約半数は地元で就職。看護や保育などの専門学校に進んだ3割の生徒も、資格を得ていずれば地元で就職したいという者がほとんどです」。

こう話すのは、自身が同校の第一期生でもあるという今井静雄校長だ。

「本校は昭和44年の創立。それまでこの辺りには高校がなく、地域からの強い要望で設立されました。以来、教職員と生徒、PTAや同窓会のつながりだけでなく、若狭町(旧三方町)・美浜町の両町長が交互に会長を務める後援会や行政、社会福祉協議会など、各方面から熱心に応援を頂いてきたのです。地域密着を目標に掲げる学校は多いと思いますが、文字通り、それが実現できています。本当にありがたいと思いますし、誇りでもありますが」(今井校長)。

創立時から、地域の人々と緊密な関係を築いてきたことは、同校にとって大きな財産だといえるだろう。

生活情報科の滝民恵先生は「自慢できることが三つあります」と笑顔を見せる。

「一つは、生徒が誰にでも明るくあいさつできること。二つ目は文武両道で、勉強や部活動、





2 年次の就業体験実習 (郵便局)

3 年次の高齢者訪問 (上) と施設実習。高齢者訪問は地元テレビ等でも取り上げられた取り組み。生徒が、一人暮らしの高齢者の自宅を訪問する。「皆いづれ歳をとると気付くことで、優しさや思いやりの気持ちが生まれるようです」と滝先生



今井静雄校長



生活情報科の
滝民恵先生



1 年次の工場見学 (左) と保育実習。保育実習は事前に読み聞かせ方などの事前指導を行う



実習を繰り返し 体験を実感へ

学校行事に一生懸命取り組むこと。部活動参加率は97%、湖を練習場とするボート部は全国大会で何度も優勝しています。そして三つ目は校内の掃除が行き届いていること。本校の校訓は『明・強・清』ですが、上級生の態度を見たり、周囲の人々からの評価を受けて、生徒たちは自然に校訓を実践してくれています」(滝先生)。

滝先生自身は卒業生ではないが、「自分の母校のように愛着を感じている」と言う。その気持ちと言葉の端々から伝わってくる。教職員や地域の人々から温かく見守られ、生徒たちは豊かな自然の中の、のびのびと学んでいる。

生活情報科、食物科では、実際に働く現場を知ることを目的に、学校外と協力した実習

を積極的に取り入れている。

生活情報科では、1年次に工場見学(1日)や保育実習(3日間)、2年次に就業体験実習(4日間)、3年次に介護実習(高齢者訪問3日間+施設実習1日)と、毎年学校外での実習を行っている。就業体験実習はそれぞれの希望の職種で行うが、その他の実習は同科の生徒全員が一緒に

取り組む。3年間を通して、自分に合った職業を探し、見つけられるよう、幅広く体験させることが目的だ。

就業体験実習の事前・事後指導は同科の学設定科目「マナー演習」で行う。事前には身なりやあいさつの大切さを説明し、事後はレポートをまとめ、1年生に向けて自身の体験をプレゼンテーションする。

また総合的な学習の時間に当たる「論考」の時間を利用して、校長、進路指導担当や生活指導担当の教員、学年主任が交代で、実習で意識しておくべきことについて話しているそうだ。

「それぞれの教員が少し違った角度から、何度も繰り返し話をすることに効果があると思っています。校長からは、地域の人が仕事の邪魔になるのにもかかわらず受け入れ指導してくれることの意味を自覚するようにという話があり、進路指導担当教員からは、就職先になるかもしれないのだから意識を高く持って臨むようにという話があります。生活指導担当の教員からは、先輩がしっかりとやってきてくれたから今年も受け入れてもらっている、次につながるように自分たちも真剣に取り組むようにと話します」(滝先生)。

食物科でも2年生で就業体験実習(3日間)、3年次に校外給食実習(5日間)を行うほか外部講師を招いた実習などもある。また、普通科でも希望者は2年次に就業体験実習(3

日本秘書クラブによるマナー指導。
 恥ずかしがりながらも真剣に取り組んだ。
 他の生徒の実技を見ることで、自分のできていないところを
 振り返るきっかけにもなったようだ



日間)に参加できる。
 これらの実習も、先に今井校長が話した通り、地域の理解と支援があつて成り立つ取り組みだ。地元の産業を担う若者を育てようという地域ぐるみでの熱意が感じられる。

秘書検定から 実践につなげたい

生活情報科の「マナー演習」は、2年次と3年次の2年間を通して設定された科目である。ちょうど就業体験実習を終えた2年次後半から3年次の前半にかけては秘書検定の指導を行っている。目標は3・2級の合格だ。
 「近年の生徒の様子を見ると、マナーが大切だということは、以前よりもよく理解しているように思います。しかし、秘書検定に出てくるような職場の様子がピンとこないのか、解答するのは難しいようです。教える教員の側も実際には知らなかったことがたくさ

ん出てきます。職員室の状況を例にするなど、できるだけ理解しやすいように工夫はしているのですが……」(滝先生)。

生徒の意識を変えるきっかけになればと、滝先生は2年生の「マナー演習」の時間を利用して、日本秘書クラブにマナー指導を依頼した。実技指導を行うのはこれが初めてだ。

10月9日、開始早々「よろしくお願ひいたします!」という講師の盛洋子先生、大竹奈穂子先生の声に、普段通りにあいさつをした生徒たちがざわめいた。

「私たちの今のあいさつと皆さんのあいさつ、どこが違いましたか?」。講師の質問に何人かが手を挙げ「いたします、と言っていた」「言葉を使った後でお辞儀をしていた」「笑顔」「姿勢がいい」と、感じたことを発表する。「今日の講座の後には、皆さんこれくらいできるようになっていきますよ」と講師に笑顔向けられるが、生徒たちはまだ半信半疑だ。

それから約2時間、立ち方やお辞儀、あいさつ、入退室、座り方など、慣れない言葉遣いや姿勢に、生徒たちは恥ずかしさや戸惑いが入り交じった表情を見せながらも、真剣に練習を繰り返した。一人一人が実技をし、やり直し、一つできるごとに拍手を送り合った結果、「ありがとうございます」と終了のあいさつをするころには、生徒たちははっきりと背筋が伸びたお辞儀ができるように。

後日集められた感想からは、「膝をつけ、背

筋を伸ばす姿勢がこんなに大変だと思わなかった」「すぐ忘れてしまいそうだから、普段も姿勢やあいさつは気を付けたい」「第一印象をよくするには笑顔がとても大切だと分かった」「先生方のようにしぐさや言動などがきれいな女性になりたい」と、短時間ながら多くのことを学んだ様子が見て取れる。卒業までの間にどれだけのことを身に付けられるか、その成長が楽しみだ。

講座を受けた2年生はこれから秘書検定を受験する。既に3・2級に合格している3年生にも話を聞いた。「社会人としては当たり前でも、席次のことや、お客さまを訪問するときには受付に行く前にコートを脱ぐということも勉強するまで知りませんでした」と大磯未来さん。宮本柘衣さんも、「正しい言葉遣いは分かってよかったことの1つ。そして招待状の返信の書き方や冠婚葬祭のマナーも、実践の機会がありそうなので、勉強できてよかったです」と話す。二人は学校生活の中でも、先生に対するあいさつや言葉遣いに気を付けるようになったそうだ。卒業後は看護専門学校に進み、看護師を目指すという二人。しっかりと話しぶりとさわやかな笑顔は、そのまま後輩のお手本になりそうだ。

3年生の大磯未来さん(左)、宮本柘衣さん